国境地帯における言語状況の変遷に関する一考察
── ベルギーのドイツ語共同体を例に ──

黒　子　葉　子

1. はじめに

ベルギーの東端に位置する、ドイツとルクセンブルクに国境を接する地帯には、ドイツ語を母語とする少数の住民が暮らしていることがよく知られている。この領域は、1984 年以降、ドイツ語共同体 (Deutschsprachige Gemeinschaft) と呼ばれる独自の共同体を構成し[1)]、オランダ語共同体 (Flämische Gemeinschaft) やフランス語共同体 (Französische Gemeinschaft) と同様に、言語と文化に関する自治権を有している。前回の論考（黒子 2017）では、ベルギーの少数言語であるドイツ語を基準とした自治のモデルが成立した背景について考察した。その際に、ベルギーにおけるオランダ語系住民とフランス語系住民の積年の言語対立と、ベルギーとドイツの間の第二次世界大戦後の関係改善というふたつの要因が、ドイツ語共同体の設立に大きく影響を及ぼしていることを示した。また、現在のドイツ語共同体の言語状況の一端を、メディアおよび教育制度の観点から明らかにすることを試みた。ただし、共同体内の言語分布や言語使用の実態に関しては、詳細に論じることができなかった。そこで本稿では、ドイツ語共同体の領域がこれまで辿ってきた言語状況の変遷に焦点を当て、とりわけ、近代における言語への基本的な態度の変化がドイツ語共同体の

1）本稿では、必要に応じて、Deutschsprachige Gemeinschaft を DG と略記する。

領域にどのような影響をもたらしたのかを検討することにしたい。

本論文の構成は次の通りである。まず、2 節でベルギーにおけるドイツ語共同体の位置づけとその地域的特徴について述べる。その際に、共同体の北部と南部の社会構造の違いにも触れる。続く 3 節では、共同体内の伝統的な諸方言の分布を示し、その音韻的側面と語彙的側面を説明する。最後に 4 節では、共同体の領域にかつて生じた複言語的状況から単一言語的状況への転換を取り上げる。さらに、この転換によって当地の言語が被った影響を、ダイグロシアの観点から分析する。

2. ベルギーのドイツ語共同体の位置づけ

2.1. ベルギーの地方行政区分と公用語

ベルギー王国、通称ベルギーは、3 つの地域 (Region) と 3 つの共同体 (Gemeinschaft)、計 6 つの地方行政区分から構成される連邦制国家である。3 つの地域とは、北部のフランデレン地域 (Flämische Region)、南部のワロン地域 (Wallonische Region)、およびブリュッセル首都圏地域 (Region Brüssel-Hauptstadt) である。3 つの共同体とは、オランダ語共同体、フランス語共同体、およびドイツ語共同体である。

図 1　ベルギーの連邦構成体[2)]

2) Das Bürgerinformationsportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens „Das belgische Staatsgefüge“ http://www.ostbelgienlive.be/desktopdefault.aspx/tabid-97/205_read-918 より引用。

図 1 からわかるように、地域と共同体は地理的に大きく重なり合っている。すなわち、フランデレン地域はオランダ語共同体と一致しており、オランダ語が公用語 (Amtssprache) とされている[3)]。ワロン地域の大部分はフランス語共同体であり、そこではフランス語が公用語とされているが、東部のドイツ国境地域にあたるドイツ語共同体の領域では、ドイツ語が公用語とされている。ブリュッセル首都圏地域では、オランダ語とフランス語の二言語が併用され、オランダ語共同体とフランス語共同体の双方に自治権が与えられている。これらの組織はそれぞれ議会と政府を持ち[4)]、権限分野において独自の政策を展開している。つまり、ベルギー連邦政府の権限は外交、国防、財政、社会保障、司法等に限定されており、地域政府は経済、雇用、公共事業、都市開発、環境等を、共同体政府は言語、文化、教育、厚生等を管轄している。

オランダ語共同体の人口は約 600 万人、フランス語共同体の人口は約 420 万人を数える。これらとは対照的に、ドイツ語共同体の人口は 7 万 7 千人ほどで、ベルギーの総人口の 1% にも満たない。このような圧倒的な少数派でありながらも、ドイツ語共同体はオランダ語共同体およびフランス語共同体と同等の地位にある連邦構成体として、憲法上は規定されている。

さて、Ammon / Bickel / Lenz (2018: XXXIX) は、複数中心地言語 (plurizentrische Sprache) としてのドイツ語を構成するもののひとつに、ベルギーのドイツ語共同体を挙げている。複数中心地言語とは、複数の標準変種を持つ言語である。すなわち、ある言語がふたつ以上の国において国家的公用語 (nationale Amtssprache) あるいは地域的公用語 (regionale Amtssprache) として使用され、それによって標準語との差異が形成される場合に、その言語を複数中心地言語と呼ぶ。ドイツ語共同体のドイツ語は、ベルギーの国家的公用語というより地域的公用語とみなすほうが適切であろうと上掲書は述べている

3) フランデレン地域のオランダ語話者は自らの言語をフラマン語 (Flämisch) と呼ぶが、本稿では、フラマン語の詳細には立ち入らない。
4) ただし、フランデレン地域とオランダ語共同体は領域が一致することから、議会と政府が事実上統合されている。

(Ammon / Bickel / Lenz 2018: LVIII–LIX)。その理由としては、ドイツ語共同体がワロン地域に組み入れられていることが挙げられる。つまり、ドイツ語共同体においてはドイツ語が唯一の公用語であり、学校教育（特に初等教育）で優先的に用いられる言語でもあるが、共同体内の公文書はドイツ語と並んでフランス語でも作成する必要があり、中等教育では授業の一部をフランス語で行うことが必須とされる。実際に、ドイツ語共同体の住民の多くは、日常的にドイツ語と並んでフランス語を使用する複言語話者である。ただし、先述の通りドイツ語共同体も独自の議会と政府を有しており、共同体の文化的自律性は保証されている。

2.2. ドイツ語共同体の北部と南部

前節でも言及したように、ベルギーのドイツ語共同体は、ワロン地域東部のリエージュ州 (Provinz Lüttich) に属している。ドイツとの国境地帯に位置するドイツ語共同体の領域は、東ベルギー地方 (Ostbelgien) やオストカントネ地方 (Ostkantone) と呼ばれることもある[5)]。この地方はフランス革命期以降、フランス（1794–1815 年）、ドイツ（1815–1920 年）、ベルギー（1920–40 年）、ドイツ（1940–45 年）、ベルギー（1945 年から現在）と、度重なる支配国の変遷を経験している。とりわけ、ナポレオン戦争終結から第一次世界大戦終結までの 100 余年という長い間、ドイツ（プロイセン）に属していたことは注目に値する[6)]。

5）本来、東ベルギー地方（オストカントネ地方）という呼称は、厳密には現在のドイツ語共同体よりも広い範囲を指すものである。すなわち、ドイツ語共同体を構成するオイペン郡とザンクト・フィート郡だけでなく、フランス語共同体の一部であるマルメディ郡 (Kanton Malmedy) もそこに含まれる。マルメディ (Malmedy) とヴァイスメス (Weismes / Waimes) の 2 自治体から成るマルメディ郡には、ドイツ語話者も居住しているが、フランス語話者が多数を占めている。それゆえ、現在の 3 つの共同体の前身である文化共同体 (Kulturgemeinschaft) が 1970 年初頭に発足した際に、マルメディ郡はフランス語文化共同体に含められたという経緯がある。ただし、このような本来的な東ベルギー地方の概念とは無関係に、2017 年よりドイツ語共同体政府は DG に代わって Ostbelgien をドイツ語共同体の「商標」として積極的に使用する方針を取っている。

6）この地方の歴史的背景およびドイツ語共同体の設立の経緯については、拙稿（黒子 2017）を参照されたい。

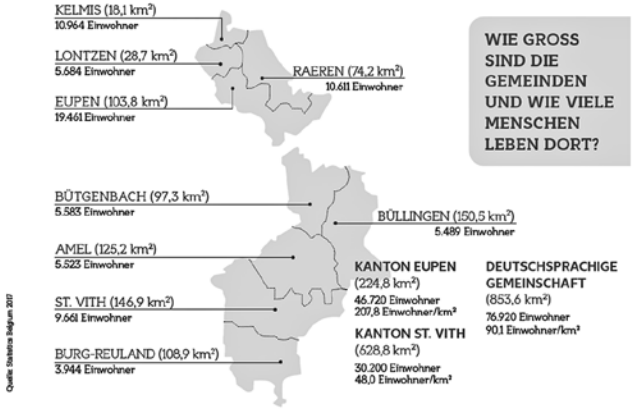

図 2　ドイツ語共同体の各自治体の人口と面積（2017 年）[7)]

Ministerium der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens (2017: 5) によれば、ドイツ語共同体の総面積は 853.6 km^2、総人口は 76,920 人である。人口の内訳は、約 79%（60,995 人）がベルギー国籍保有者、約 18%（13,630 人）がベルギー以外の EU 出身者、約 3%（2,295 人）が非 EU 出身者である（2017 年）。

ドイツ語共同体は、北部のオイペン郡 (Kanton Eupen) と南部のザンクト・フィート郡 (Kanton St. Vith) のふたつに分かれる。オイペン郡は、ケルミス、ロンツェン、オイペン、ラーレンの 4 つの自治体 (Gemeinde) から成る。面積は 224.8 km^2 で、共同体全体の 26%程度にすぎないが、共同体人口の 6 割に当たる 46,720 人（2017 年）がこの地域に住んでいる。中心都市はオイペンで、ここにドイツ語共同体の議会と政府が置かれている。ザンクト・フィート郡は、ビュトゲンバッハ、アメル、ザンクト・フィート、ブルク・ロイラント、ビュリンゲンの 5 自治体から構成される。面積は 628.8 km^2、人口は 30,200 人 (2017 年)、中心都市はザンクト・フィートである。共同体の北部と南部が地理的に隔てられているのは、アイフェル山地のホーエス・フェン (Hohes Venn) という高層湿原が中間に存在し、その一部がフランス語共同体のマルメ

7）Ministerium der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens (2017: 5) より引用。

ディ郡の領域になっているためである。ベルギーで最も高い山であるボトランジュ (Botrange) も、この領域に位置している。

現在、共同体の北部と南部をつなぐ公共交通機関はバスのみである。かつてはホーエス・フェンを縦断しドイツのアーヘンとルクセンブルクのトロワヴィエルジュ (Troisvierges) 間の 125 km を結ぶフェン鉄道 (Vennbahn) という路線が存在していた。この鉄道は 1885–89 年に開設され、ラーレン、ヴァイスメス、ザンクト・フィートなどを経由していた。また、ラーレンからオイペン、ヴァイスメスからマルメディに至る支線も建設され、この一帯のネットワークを形成していた。しかし、第二次世界大戦末期の 1944–45 年、フェン鉄道の設備（橋、トンネル、駅舎等）が徹底的に破壊されると、戦後も完全に機能を回復することなく、廃止に至っている[8)]。今日ではフェン鉄道の沿線は自転車道路として整備され、人気の観光資源のひとつとなっている[9)]。

このように地理的に切り離されたドイツ語共同体の北部と南部は、異なる地域的特性を持っている。北部のオイペン郡はアイフェル山地に隣接する地帯で、フランス語共同体のヴェルヴィエやリエージュ、ドイツのアーヘン、オランダのマーストリヒトなどにもアクセスしやすい位置にある。オイペンはもともと 18 世紀に毛織物業で栄えた街であり、現在でも共同体の産業やメディアの中心地となっている。Ministerium der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens (2017: 8–9) によると、2016 年 6 月時点で、共同体内の雇用者の 3 分の 1 以上と、被雇用者のほぼ半数がオイペンに集中しているという。オイペン以外の北部自治体は大部分が田園地帯であるが、ケルミスには菱亜鉛鉱の鉱山があり、19 世紀にはヨーロッパで最も重要な採掘地帯でもあった。

一方南部のザンクト・フィート郡は、アイフェル山地の森林や牧草地が広がる自然豊かな高原地帯である。伝統的に南部では農林業が営まれているが、近

8）1950 年代にはまず旅客輸送が終了し、その後 1980 年代には貨物輸送が終了している。一部路線（ザンクト・フィートとヴァイスメスの区間）はその後も観光用に保存されたが、2002 年には営業を完全に終えている。

9）Ministerium der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens (2017: 7) によれば、2016 年に旧フェン鉄道のサイクリングルートを利用した観光客は 345,500 人に上る。

年はとりわけ観光業に力が入れられている。Ministerium der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens (2017: 7) によれば、2016 年にドイツ語共同体を訪れた人数は 151,297 人であるが、そのうちの 7 割以上（108,968 人）が南部を訪問しているという。なかでもビュトゲンバッハは、ホーエス・フェン自然公園に近く、湖に面した保養地として人気が高い。南部の中心都市であるザンクト・フィートは、かつてフェン鉄道の重要な分岐点として経済的に発展した。しかし、1944 年 12 月のアルデンヌ攻防の際に大量の爆撃を受け、街は灰燼に帰した。現在では商店や教育機関が集まる小ぢんまりとした街といった趣ではあるが、旧フェン鉄道のサイクリングルートとしても観光客を集めている。

3. ドイツ語共同体の諸方言

3.1. 方言圏の分類

2.2 節で見た通り、ドイツ語共同体の北部と南部は産業構造や人口密度といった観点で異なる特徴を示しているが、この地方で話されている伝統的なドイツ語方言に関しても、共同体の北部と南部で大きな差が見られることが知られている。前回の論考（黒子 2017）でも言及したように、この地方の方言は、南低地フランケン語 (Südniederfränkisch)、リプアーリ語 (Ripuarisch)、モーゼルフランケン語 (Moselfränkisch) という 3 つの異なるグループに大きく分けられる。

図 3　東ベルギー地方のドイツ語方言分布[10)]

10）Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens (2014: 21) より引用。

南低地フランケン語は、ドイツ語共同体北部のケルミス、ロンツェン、オイペンで話されている。また、フランス語共同体に属するブライベルク（Bleyberg）[11]、ベーレン（Baelen）、ヴェルケンラート（Welkenraedt）にも話者がいる。リンブルフ地方（ベルギーのリンブルフ州とオランダのリンブルフ州）で用いられるリンブルフ語（Limburgisch）も同じグループに属すると言われる。リプアーリ語は、ドイツ語共同体北部のラーレンと、南部のビュトゲンバッハ、

図 4　ドイツ西部の方言分布[12]

11）ブライベルクのフランス語名はプロンビエール（Plombières）である。ブライベルク、ベーレン、ヴェルケンラートの 3 自治体はモンツェン地方（Montzener Land）と呼ばれる。この領域は公式にはフランス語圏とされているためドイツ語共同体には含まれないが、伝統的にドイツ語方言を話す人々が暮らしている。ちなみに、彼らは自らの方言を Platdiets ないし Plattdütsch と呼んでいるため、これらの自治体を Plattdeutsche Gemeinden と呼ぶこともある。ただし、ここでの Plattdeutsch はドイツ北部の低地ドイツ語（Plattdeutsch, Niederdeutsch）を指すものではない。

12）LVR-Institut für Landeskunde und Regionalgeschichte „Rheinischer Fächer“ http://www.rheinische-landeskunde.lvr.de/de/sprache/sprachatlas/dialektkarten/rheinischer_faecher/rheinischer_faecher_1/detailseite_159.htm より引用。

ビュリンゲンで話されている。また、オランダのリンブルフ州のファールス（Vaals）にもリプアーリ語の話者がいる。モーゼルフランケン語は、ドイツ語共同体南部のザンクト・フィートとブルク・ロイラントで話されている。この地域が隣接するルクセンブルクの公用語、ルクセンブルク語も、起源上はモーゼルフランケン語のひとつである。

ドイツ西部に目を向けると、南低地フランケン語はユルディング線（ik-ich 線、図 4 の 2 の等語線）とベンラート線（maken-machen 線、図 4 の 3 の等語線）の間に位置する方言圏で、例えばデュッセルドルフやメンヒェングラートバッハがその領域に含まれる。リプアーリ語はベンラート線とアイフェル線（Dorp-Dorf 線、図 4 の 4 の等語線）の間の方言圏で、ケルン、アーヘン、ボンなどが含まれる。モーゼルフランケン語はアイフェル線とフンスリュック線（dat-das 線、図 4 の 5 の等語線）の間の方言圏で、ジーゲンやコブレンツが含まれる。以下に引用する Cornelissen（2015: 22–23）の例は、（1a）が標準ドイツ語、（1b）がメンヒェングラートバッハ方言、（1c）がケルン方言、（1d）がジーゲン方言での対応形である。ベンラート線の北と南で、k と ch の対立が語頭を除いて存在することが確認できる。

（1） a. Buch, Bauch, Kirche, kochen, Küche, Köln, machen, riechen, Sache, schwach
b. Book, Buuk, Keerek, koëke, Kück, Kölle, make, ruke, Saak, schwaak
c. Booch, Buch, Kirch, koche, Köch, Kölle, mache, ruche, Sache, schwach
d. Booch, Buch, Kiërche, koche, Keche, ‐, mache, ruche, Sache, schwach

3.2. 方言の音韻的特徴

本節ではドイツ語共同体の伝統的な方言の音韻的特徴を、地理的に北部と南部に分けて示す。参考までに、以下に集落の分布図を挙げておく。

図 5　北部（左）と南部（右）の集落分布[13)]

3.2.1.　北部の諸方言

まず北部方言を観察する。3.1 節で述べた通り、北部方言はベンラート線によって西側の南低地フランケン語と東側のリプアーリ語に二分される。以下の例文は、(2a) が標準ドイツ語形、(2b) が西側のケルミス自治体に属するヘルゲンラート (Hergenrath) の方言形、(2c) が東側のラーレン自治体に属するハウゼット (Hauset) の方言形である (GRECC 1990: Karteikarte 83)。

図 6　北部方言の分布（図 3 を改編、再掲）

13）Das Kulturportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens „Dialektatlas der Deutschsprachigen Gemeinschaft“ http://www.ostbelgienkulturerbe.be/desktop default.aspx/tabid-3551/catid-108 より引用、一部改編。

(2) a. Das brauchst du nur laufen zu lassen.
b. Dat bruks-te mär loope te loote.
c. Dat bruchs-te mär loofe tse lose.

(2b) に現れる母音の後の無声破裂音 /p/ (*loope*) と /k/ (*bruks-te*) は、(2c) では無声摩擦音の /f/ (*loofe*) と /x/ (*bruchs-te*) にそれぞれ対応している。また、(2b) の /t/ (*te, loote*) は (2c) の /ts/ (*tse*) あるいは /s/ (*lose*) に対応している。ヘルゲンラートとハウゼットの集落は 3 km 程度しか離れていないが、この例からは第二次子音推移の差が見て取れる。

ところで、オイペンの方言は南低地フランケン語に属するとされるが、ここでは *Kaint* „Kind“ や *Haunt* „Hund“ のような独特の二重母音化の現象が確認される。GRECC (1990: Karteikarte 83) によれば、フランス語共同体に属するベーレンのドイツ語方言でも、同様の二重母音化が 20 世紀初頭まで見られたという。

3.2.2. 南部の諸方言

続いて、南部方言を観察する。3.1 節でも触れたように、南部方言はアイフェル線が基準となり、北西側のリプアーリ語から南東側のモーゼルフランケン語へと移行する。北西側にあたるのは、ビュトゲンバッハ、ビュリンゲンと、ザンクト・フィートの一部のレヒト (Recht) という集落である。GRECC (1990: Karteikarte 84) によれば、この領域では *Dorp* „Dorf“ や *hälpe* „helfen“ といった例が確認される[14]。これらは、南東側で使われる *Dorf* „Dorf“ や *hälfe* „helfen“ と対照的である。

さらに、アイフェル線と並行して、*Is* と *Eis* を分ける等語線が伸びている (図 7 参照)。この線は、初期新高ドイツ語期の二重母音化 (Frühneuhochdeut-

14) ただし、レヒトでは *Dorep* „Dorf“ の例は確認されるものの、*hälefe* „helfen“ や *wärefe* „werfen“ のように、/p/ が /f/ へ変化している例も存在する。(GRECC 1990: Karteikarte 84)

sche Diphthongierung)、すなわち長母音 /i:/、/u:/、/y:/ から二重母音 /ai/、/au/、/ɔy/ への推移の境界を示している。南部方言の北西側にあたる集落では、*Iis* „Eis“ や *Huus* „Haus“ のような長母音が保持されているのに対し、南東側の集落では、*Eis* „Eis“ や *Hous* „Haus“ のような二重母音化が確認される。

図 7　南部方言の分布（図 3 を改編、再掲）

また、GRECC (1990: Karteikarte 84) によれば、先に挙げたレヒトと、東ベルギー地方の最南部に位置するブルク・ロイラントでは、*maache* „machen“ や *koche* „kochen“ の ch が無声軟口蓋摩擦音 /x/ としてではなく、無声硬口蓋摩擦音 /ç/ や無声後部歯茎摩擦音 /ʃ/ として実現される。つまり、調音点が前へ移動し、*maasche* や *kosche* のような発音になる。これは、ルクセンブルク語とも共通する特徴である。

3.3.　方言の語彙的特徴

3.2 節の観察からわかるように、ドイツ語共同体内の伝統的な方言は、多様な音韻的特徴を示している。同様に、語彙に関しても、地域によるヴァリエーションが大きい。本節では、例として *Ostern*「復活祭」、*Ärmel*「袖」、*Dachboden*「屋根裏部屋」を挙げておきたい。

ドイツ語共同体が公開しているデータによれば[15]、「復活祭」を表す標準ドイ

15）Das Kulturportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens „Dialektatlas der Deutschsprachigen Gemeinschaft“ http://www.ostbelgienkulturerbe.be/desktopdefault.aspx/ tabid-3551/catid-1088 参照。このサイトにおいて、全 69 語の言語地図が確認できる。

ツ語の *Ostern* に対応する語は、ドイツ語共同体の北部で *Posche*、南部の北西側で *Ostere* や *Owstere*、南部の南東側で *Ustere* や *Uəstere* となる（図 6、7 参照）。北部に独特の *Posche* という語は、ギリシア語・ラテン語の *pascha* から派生したものであり、キリスト教の復活祭がユダヤ教の過ぎ越しの祭 (Pascha-Fest) を起源とすることを示唆している。

また、「袖」を表す標準ドイツ語の *Ärmel* に対応する語は、北部の西側で *Mo* や *Mouw*、北部の東側で *Mo*、*Mouw*、*Mau*、南部の北東側で *Mau*、南部の南西側で *Ärmel*、*Ärəm*、*Arəm* となる（図 6、7 参照）。上記出典によれば、*Mo*、*Mouw*、*Mau* は、元来オランダ語・低地ドイツ語系の語である。例えば中高ドイツ語の騎士道物語には *mouwe*（袖）という語が時折現れるが、これは、フランスの騎士文化を受容した際にこの地域が仲介の役割を果たしたことの現れである。

さらに、「屋根裏部屋」を表す標準ドイツ語の *Dachboden* に対応する語は、共同体北部で *Söller* や *Sölder*、南部の西側で *Speicher*、*Speischer*、*Spischer*、*Spescher*、南部の東側で *Estrich*、*Estrisch*、*Esserisch* となる[16)]。これらはすべて、ギリシア語・ラテン語に由来する。共同体北部の *Söller* およびそのヴァリエーションは、ラテン語の *solarium*（テラス）を語源としている。この語は、かつてドイツのニーダーライン地方にも分布していた。また、オランダ語の *zolder*（屋根裏部屋）とも関連している。共同体南部の西側で見られる *Speicher* およびそのヴァリエーションは、ラテン語の *spicarium*（穀物貯蔵庫）を語源としている。この語は現在もドイツのラインラント地方（ケルン周辺部からプファルツまでの一帯）に広く分布している。共同体南部の東側で使われる *Estrich* およびそのヴァリエーションは、ギリシア語の *óstrakon*（粘土瓦）を語源としている。この *Estrich* という語はスイスでも同様に「屋根裏部屋」を指すが (König / Elspaß / Möller 2015: 237)、ドイツやオーストリアの標準ドイツ語では

16）Das Kulturportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens „Dialektatlas der Deutschsprachigen Gemeinschaft - Dachboden“ http://www.ostbelgienkulturerbe.be/desktopdefault.aspx/tabid-3551//linkid-38699/catid-108/pg- 参照。

「セメントなどによって作られた継ぎ目のない床」を指すという点で、興味深い対照を成している。

4. 近代における言語政策と国境地帯の言語状況の変化

3 節で示したように、ベルギーのドイツ語共同体という比較的限られた領域に、互いに異なる言語的特徴を示す諸方言が共存している。ただし今日では、このような伝統的な方言は、ドイツ国内と同様に次第に衰退に向かっていると言われている。例えば Ammon (2018: 239) には、ドイツ語共同体の言語に関して、以下のような記述がある。

> ドイツ語方言（北部の低地フランケン語とリプアーリ語、南部のリプアーリ語とモーゼルフランケン語）は比較的高齢の世代には依然として使用されているが、比較的若年の世代には標準ドイツ語のほうが好まれている。［翻訳は筆者による］

同様に、Ammon / Bickel / Lenz (2018: LIX) も、ドイツ語共同体における標準ドイツ語の優位性を次のように指摘している。

> 書き言葉だけでなく、話し言葉においても、標準ドイツ語が優勢であり、とりわけ公の場では標準語が用いられる。しかし私的な領域でも、（そこでは依然として方言が話されてはいるものの、）部分的には標準語が使用される。標準ドイツ語から方言への関係は、このふたつの言語形式を厳密に分けるダイグロシア (Diaglossie) というよりも、むしろひとつの連続体を成している[17]。［翻訳は筆者による］

17）標準語と方言が連続体を構成する例として、以下に Cornelissen (2015: 135) からアーヘンの 3 つの言語変種を挙げる。

このような標準語の優位性は何に起因し、どのように確立されていったのだろうか。本節では、この疑問点を明らかにするため、ドイツ語共同体の領域の近代の歴史を振り返りながら、方言と標準語に関する言語状況の変遷について考察する。またその際に、ドイツ語以外の言語（特にフランス語）との関係についても考えていきたい。

4.1. アンシャン・レジーム時代の複言語的傾向

まず、3 節で見たドイツ語方言の分布は、この領域がかつて受けていた支配関係を反映していると言える。Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2016: 10) によれば、現在のドイツ語共同体の領域は、1794 年以前のいわゆるアンシャン・レジームの時代に、北部と南部で異なる支配関係に置かれていた。すなわち、共同体北部は大部分がリンブルフ公国 (Herzogtum Limburg) に属していたのに対し[18]、南部は大部分がルクセンブルク公国 (Herzogtum Luxemburg) に属していた[19]。

---

a. Das haabich nich gesaakt. (Hochdeutsch; gesprochen)
b. Dat habbich nich jesacht. (Regiolekt)
c. Dat hannech nett jesaat. (Dialekt)

方言 (Dialekt) とはある集落 (Ort) において用いられ、独自の語彙、文法、音韻体系を持った古い言語形式である。これに対して地域語 (Regiolekt) とは、より大きなまとまりである地域 (Region) において用いられ、標準語に依拠しながらも、方言との類似性も示す言語形式である。例えば (b) の地域語には、*dat* „das“ や、*jesacht* „gesagt“ の語頭の *j-* のような方言的な要素が出現している。このように、地域語は標準語から流動的に移行しながらも、方言からの影響も受けているため、標準語と方言が構成する連続体の中間段階に位置付けられる。

18) 1283 年にリンブルフ公国の継承権をめぐってベルク伯アドルフとゲルダーン伯ライナルトの間で争いが起こると、ベルク伯はブラバント公ヨハンに、ゲルダーン伯はケルン大司教ジークフリート・フォン・ヴェスターブルクに助力を求めた。ケルン大司教の権力拡大を脅威に思ったケルン市民はブラバント公に加勢した。ニーダーライン地方を巻き込んだこの争いは、1288 年のヴォリンゲンの戦い (Schlacht von Worringen) において、ブラバント公の勝利で決着した。こうしてリンブルフ公国は、1288 年以降ブラバント公国 (Herzogtum Brabant) の支配下に入った。その後、1406 年にブラバント公国は協定によりヴァロワ＝ブルゴーニュ家 (Haus Burgund) に相続されている。

19) ただし、共同体南部の東端に位置するマンダーフェルト・シェーネベルク (Manderfeld-Schöneberg) は、トリーア選帝侯領 (Kurfürstentum Trier) の一部であった。

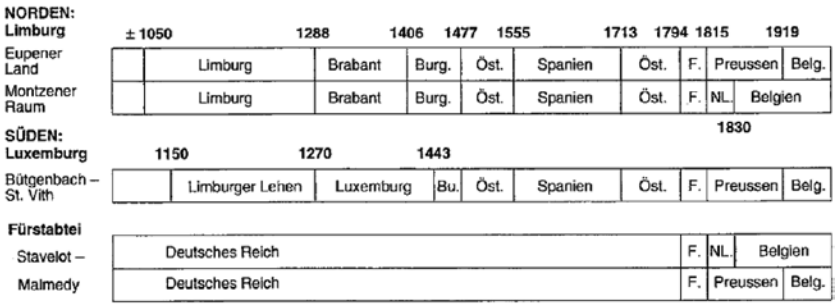

図 8　ドイツ語共同体北部と南部の年表[20)]

ところで、現在のドイツ語共同体の住民の多くは、ドイツ語と並んでフランス語を日常的に書き言葉としても話し言葉としても使用しているが、国境地帯のこの種の複言語的な傾向は決して新しいものではなく、長い歴史的な伝統に沿ったものであるという。例えば GRECC (1990: Karteikarte 81) は、アンシャン・レジームの時代に、マーストリヒト、アーヘン、リエージュおよびルクセンブルク公国の広い領域において、自然発生的な複言語的傾向が優勢であったことを指摘している。また Möller (2017: 233) は、(i) 共同体南部の領域では 18 世紀にドイツ語とフランス語の文章語での公文書が競合していたこと[21)]、(ii) 共同体北部の領域ではリンブルフ公国がブラバント公国と結びついていたために[22)]、18 世紀にドイツ語、フランス語に加えてオランダ語の文章語も定着して

20) GRECC (1990: Karteikarte 81) より引用。なお、年表中の略称は次の通りである。Burg. oder Bu. = Burgund, Öst. = Österreich, F. = Frankreich, NL. = Niederlande, Belg. = Belgien

21) ルクセンブルク公国は、西部のロマンス語系住民と、東部のゲルマン語（モーゼルフランケン語）系住民から構成されていた。リンブルフ公国と同様に、ルクセンブルク公国も 15 世紀にヴァロワ＝ブルゴーニュ家の支配下に入り、それ以降、領内にフランス語の文章語が根付いていった。(Neuß 2016: 230)

22) リンブルフ公国とブラバント公国の領内には、南部にロマンス語系住民が、北西部にゲルマン語系住民がいた。ゲルマン語系住民は、ラーレン周辺部のわずかなリプアーリ語話者を除けば、大部分が低地フランケン語を話していた。(Neuß 2016: 229)

いたことを示している[23)]。

4.2. フランス、プロイセン統治時代の単一言語化

北のリンブルフ公国と南のルクセンブルク公国による支配関係が崩れたのは1794年である。両公国を含む南ネーデルラントはハプスブルク家の統治下にあったが、フランス革命政権に占領され、フランスに併合された。このとき、現在のドイツ語共同体の領域は、北部も南部もフランスのウルト県（Département der Ourthe）に組み込まれた。さらに、ナポレオン戦争後の1815年、ウィーン会議にてラインラントのプロイセンへの帰属が決定し、現在の共同体北部、南部ともにプロイセンの支配下に入った。同時に、現在のマルメディ郡の領域もプロイセンへと割譲された。こうして、1920年までの100年以上にわたり、東ベルギー地方はプロイセンのライン州（Rheinprovinz）の一部となった。

フランス革命期からプロイセン統治時代に特徴的であるのは、言語が単なる意思疎通の手段から国家的な統一性とアイデンティティの象徴へと変化し、他の国家との境界を定める基準となったことである。また同時に、方言が口頭でのコミュニケーションの手段という役割から次第に脱落していった。教育制度の向上も影響してますます多くの人が書き言葉を習得できるようになり、それに伴って話し言葉の標準語化も進んでいったのである。

以下では、フランス統治時代（4.2.1節）とプロイセン統治時代（4.2.2節）に時代を区切りながら、当時の言語状況をさらに詳しく検討する。

23）ここでの「オランダ語」には、「ブラバント語」と呼ばれるオランダ語の変種も含まれている。フランス革命期以前の北部でのドイツ語、フランス語、オランダ語の競合関係は、およそ次の通りである。オランダ語（ブラバント語）は、主に行政および司法の言語として用いられていた。ドイツ語は、主に学校教育および教会の言語として用いられていた。18世紀の終わりまでドイツ語が公文書の言語として出現することはなく、フランス語が次第にオランダ語と競合するようになった。（Möller 2017: 233−234）

4.2.1. フランス統治時代における公文書のフランス語化

上述の通り、フランス革命以降、「ひとつの国民国家はひとつの統一言語を必要とし、その獲得を目指さなければならない」という考えが広がった。Möller (2017: 234–236) によれば、そのような潮流の中で、1793–94 年にはフランス全土において公文書をフランス語で作成することが求められ、それに違反した場合には処罰を受けることが条例で定められた。また同時に、フランス語が共和国内で唯一の学校教育の言語に設定された。

ところが、このような法的な規定と実際の運用の間には、大きな隔たりがあった。そこで 1803 年には、公文書作成の規定が部分的に書き換えられた。それは、「新たにフランスに併合されたベルギー、ドイツ、北イタリアの各県では、公文書をフランス語で作成することが求められるものの、違反した場合にも罰則はなく、地域の言語を用いた翻訳を文書に付加することも容認される」というものであった。

しかし、大部分がフランス語ないしワロン語の母語話者で構成されるウルト県においては、このような譲歩案は当初から考慮に入れられず、行政の使用言語はフランス語のみと定められた。これによって、現在のドイツ語共同体の領域に、はっきりとした変化が生じた。つまり、公文書作成に関して、1794 年以前の複言語的状況から、単一言語的状況への変更が求められることになったのである[24)]。ただし、国民学校 (Volksschule) に関して言えば、表向きにはフランス語が公式の教育言語として設定されていたが、引き続きドイツ語を用いて授業を行うことが黙認されていた。また、官庁の側からフランス語を母語とする教員がこの地域に派遣されることもなかったという (Möller 2017: 236)。

4.2.2. プロイセン統治時代におけるドイツ語への転換

1815 年のウィーン会議での決定を受けて、現在のドイツ語共同体の領域は

24) ウルト県の状況は、隣接するルクセンブルクを含むフォレ県 (Département des Forêts) とは明らかに異なっていた。すなわち、フォレ県では、引き続き法令をドイツ語で公布することが認められていた。(Möller 2017: 234)

プロイセンに割譲され、再び公用語が変更されることになった。すなわち、司法、行政、教育の言語としてドイツ語を使用することが法的に定められたのである。この政策はプロイセンによって急速に推し進められたが、マルメディのフランス語母語話者を除けば、多くの東ベルギー地方の民衆にとって、ドイツ語の公用語化はそれほど大きな転換を意味するものではなかった。なぜなら、この地方で読み書きができる人々は、すでに学校や教会で第一にドイツ語の手ほどきを受けており、文書を作成する際にも以前からドイツ語を用いていたからである (Möller 2017: 236)。

この地域の教育制度は、その他のプロイセンの州からはやや遅れをとりながらも、19 世紀の間に次第に改善されていった。1825 年に就学義務が課されると、就学率は大きく向上した。ライン州全体での就学率は 1816 年には 49% にとどまっていたが、1846 年には 86% に上昇し、1864 年には 90% に達した (Giesdorf 2017: 219、Möller 2017: 244)。このようにして、現在のドイツ語共同体の領域では、新高ドイツ語の文章語が標準語として拡大する素地が出来上がっていった。

ところで、現在のドイツ語共同体北部のオイペン周辺域（オイペン地方）では、伝統的にドイツ語が学校教育および教会の言語とされてきたものの、司法・行政の言語としてはオランダ語が優勢であった。それゆえ、18 世紀末までドイツ語が公文書作成に用いられることがなかった。また、3 節で見たように、オイペン地方は南低地フランケン語の領域にある。ベンラート線の西側に位置するこの地方の方言は、オランダ語と同様に第二次子音推移の影響を基本的に受けていない。したがって、少なくともオイペン地方では、言語的に類似した特徴を持つオランダ語の文章語が学校で教育され、日常的に標準語として使われるようになる可能性も十分にあったと考えられる (Neuß 2016: 229–230、Möller 2017: 233–236)。しかし、共同体北部の大部分がプロイセンに併合され、残りのわずかな部分（モンツェン地方）がベルギーのフランス語圏に組み込まれたために、北部におけるオランダ語の標準語化は実現しなかった。言い換えれば、北部のプロイセンへの併合に伴って、それまで比較的弱い立場にあった

ドイツ語が初めて司法・行政の言語としての地位を得たことになる。

4.3. 方言から標準語へ

Möller (2017: 245) によれば、単一言語化政策が推し進められたプロイセン統治下の 19 世紀において、東ベルギー地方の新高ドイツ語文章語と方言は、互いに異なる機能を持ち、使用領域が明確に区別されていた。すなわち、新高ドイツ語文章語が司法、行政、教会、学校における公的なコミュニケーションの言語として用いられていたのに対して、方言は主に家族や友人のような親しい間柄での日常的なやりとりで用いられていた。したがって、少なくともこの時代のこの地方では、新高ドイツ語文章語と方言がすでにダイグロシアの関係にあったと想定される。

ダイグロシアの推移は、およそ次の三段階に分けられる (Neuß 2016: 230)。第一段階は、地域に限定された単一言語（当地の方言）が使用されている状況である。第二段階になると、文章語が使用され始める。ドイツ語の場合には、1500–1800 年頃とされる。このとき、まだ文章語の使用領域は限定されていて、圧倒的多数の話者はほぼ方言のみを用いている。とりわけ農村部の話者にこの傾向が見られる。ただし、徐々にそれぞれの変種が区別され始め、異なるプレステージを持つようになる。つまり、第二段階はダイグロシアの初期段階である。続いて第三段階では、文章語が完全な規範的性格とプレステージを獲得する。ドイツ語の場合には、およそ 1800 年以降にあたる。このとき文章語は、一般就学義務に基づく継続的で広範な支援を受けることによって、使用領域のうちで最も重要なものをカバーするようになる。標準化した文章語を様々な領域で用いる可能性がますます大きくなることで、ダイグロシアは最終的に不安定な状態へと陥り、標準語が今度は方言へと作用を及ぼすようになる。つまり、第三段階はダイグロシアの最終局面である。

標準語が方言の使用領域を侵食するこの第三段階について、Möller (2017: 245–246) は次のように説明している。話者が自らの方言と標準語を意識の上ではっきりと切り離すうちに、必然的にこのふたつの変種の中間段階のようなも

のが現れてくる。これは、方言を話す環境で育った話者が、特定の状況下で、確実に習得していない標準語へと変換する場合に生じるものである。また、標準語の文章語に習熟した知識人の場合であっても、話し言葉として用いられた標準語の発音には、やはり地域的な特徴が色濃く表れていたと考えられる。

Neuß (2016: 230) によれば、ドイツとベルギーのアイフェル地方やオイペン地方の特に農村部では、1970 年代までダイグロシアの関係が確認されたという。つまり、私的な領域では方言を用い、公的な領域（役所、学校、教会など）では標準語を用いるという機能の区別が明確に存在していた。しかし現在のドイツ語共同体では、4 節のはじめに確認したように、この機能的区分が崩れ、方言の使用領域が狭まる傾向にある。これに伴って、標準語と方言の中間段階、すなわち地域語 (Regiolekt) という言語変種が生じている。

本節で見てきたように、現代のドイツ語共同体における標準ドイツ語の地位は、フランス、プロイセン統治下の単一言語化政策を根源として築き上げられている。この政策はある時期までは方言と標準語の間にダイグロシアの状況を作り出していた。しかし、今日においては、ますます高まる標準語の地位が、ダイグロシアを崩壊させるのみならず、方言そのものを消滅へ至らしめようとしている。

5. おわりに

本稿では、ベルギーのドイツ語共同体を例として、特に方言と標準語の関係に着目しながら、近代における国境地帯の言語状況がどのような変遷を辿ったのかを示した。4 節で述べたように、この領域はフランス革命期以前の複言語的状況からフランス、プロイセン統治下での単一言語的状況へと大きく転換した。それと同時に、一般的な意思疎通の手段であった方言は、国家の統一性の象徴とみなされ規範的な性格を強めていった文章語によって、次第に使用領域を奪われていった。

現在では、特に若年層において方言離れが進んでいる。本稿では詳しく扱う

ことができなかったが、ドイツ語共同体の領域では世代的な違いだけでなく、地域的な違いも確認される。とりわけ、北部方言の衰退が顕著である。2 節でも触れたように、北部と南部では社会構造が異なっている。現在、方言の使用に関して南北の地域差が見られるのは、北部がおよそ都市部であるのに対し、南部はおよそ農村部であることが影響している。すでに述べたように、北部にはドイツ語共同体の中心都市オイペンがあり、さらにマーストリヒト、アーヘン、リエージュといった都市にもアクセスしやすい位置にあることから、流動性が高い。また、共同体内の外国籍者は北部に集中している[25)]。それゆえ、住民の文化的多様性も大きい。それに対して南部には、農林業で生計を立て、三世代同居の家族形態をとる住民が比較的多い。したがって、幼年期に祖父母から伝統的な方言を受け継ぐ環境が南部には依然として残されているものと考えられる。現在のより詳しい方言の使用状況とその背景に関しては、今後も引き続き検討していきたい。

参考文献

Ammon, Ulrich (2018) *Die Stellung der deutschen Sprache in der Welt.* Berlin: de Gruyter.

Ammon, Ulrich / Bickel, Hans / Lenz, Alexandra N. (Hrsg.) (2018[2]) *Variantenwörterbuch des Deutschen. Die Standardsprache in Österreich, der Schweiz, Deutschland. Liechtenstein, Luxemburg, Ostbelgien und Südtirol sowie Rumänien, Namibia und Mennonitensiedlungen.* Berlin: de Gruyter.

Begenat-Neuschäfer, Anne (Hrsg.) (2010) *Die Deutschsprachige Gemeinschaft Belgiens. Eine Bestandaufnahme. (Belgien im Fokus. Geschichte – Sprachen – Kulturen. Band 3.)* Frankfurt am Main: Peter Lang.

Cornelissen, Georg (2015) *Kleine Sprachgeschichte von Nordrhein-Westfalen.* Köln: Greven Verlag.

Giesdorf, Jens (2017) „Schulpflicht für alle, Bildung für wenige? Über die regionale Vermehrung von Wissen über Schulen, Bibliotheken und Lesestoff.“ In: Lejeune, Carlo (Hrsg.) *Grenzerfahrungen. Eine Geschichte der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens. Band 3. Code civil, beschleunigte Moderne und Dynamiken des Beharrens (1794–1919).* S.216–229. Eupen: Grenz-Echo Verlag.

GRECC (Groupe de Recherches et d'Etudes sur la Communication Culturelle) (Hrsg.) (1990) *Grenzland seit Menschengedanken. Identität und Zukunft der Deutschsprachigen Ge-*

25) 2004 年の統計によれば、ドイツ語共同体内の外国籍者 12,851 人のうち、89% にあたる 11,035 人が北部のオイペン郡に居住している。(Stangherin / Jacquemain 2005: 52–53)

meinschaft Belgiens. Biblio-Kassette 3 : Sprache und Gesellschaft. Eupen: Grenz-Echo Verlag.

König, Werner / Elspaß, Stephan / Möller, Robert (2015[18]) *dtv-Atlas Deutsche Sprache.* München: Deutscher Taschenbuch Verlag.

黒子葉子 (2017)「ベルギーのドイツ語共同体 ── 国境を越えたドイツ語圏の広がりの把握に向けて ──」In: 獨協大学『ドイツ学研究』第 73 号. pp.29−55.

Ministerium der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens (2017) *Ostbelgien in Zahlen. Stand 2017.* Eupen. [Online: http://www.ostbelgieninfo.be/PortalData/44/Resources/dokumente/Ostbelgien_in_Zahlen_2017.pdf]

Möller, Robert (2017) „Im Zeitalter der Nationalsprachen. Sprachentwicklung im politischen Grenzraum zwischen Maas und Rhein." In: Lejeune, Carlo (Hrsg.) *Grenzerfahrungen. Eine Geschichte der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens. Band 3. Code civil, beschleunigte Moderne und Dynamiken des Beharrens (1794−1919).* S.230−251. Eupen: Grenz-Echo Verlag.

Neuß, Elmar (2015) „Der lange Weg zur deutschen Schrift- und Kultursprache. Von Volkssprachen, Schreibsprachen und Sprachwerdung in Sprachkontaktzonen." In: Lejeune, Carlo / Engels, David (Hrsg.) *Grenzerfahrungen. Eine Geschichte der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens. Band 1. Villen, Dörfer, Burgen (Altertum und Mittelalter).* S.180−197. Eupen: Grenz-Echo Verlag.

Neuß, Elmar (2016) „Wie die modernen Schriftsprache die älteren Schreibsprachen langsam verdrängten. Fragen zu einem bisher kaum beachteten Forschungsfeld an den Sprachgrenzen." In: Lejeune, Carlo (Hrsg.) *Grenzerfahrungen. Eine Geschichte der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens. Band 2. Tuche, Töpfe, Theresianischer Kataster (1500−1794).* S.224−237. Eupen: Grenz-Echo Verlag.

Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens (2014) *Das Parlament der DG. Das Haus des Bürgers.* Eupen.

Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens (2016) *Die Deutschsprachige Gemeinschaft und ihr Parlament.* Eupen. [Online: http://www.pdg.be/PortalData/34/Resources/dokumente/broschueren/Broschuere_DG_DE_Neu_2016.pdf]

Stangherin, Gregor / Jacquemain, Marc (2005) „Eine kurze soziologische Betrachtung der deutschsprachigen Belgier." In: Stangherlin, Katrin (Hrsg.) *La Communauté germanophone de Belgique – Die Deutschsprachige Gemenschaft Belgiens.* S.49−63. Bruxelles: la Charte.

Theissen, Siegfried (2013) *Neues Wörterbuch der Eupener Mundart.* Eupen: Grenz-Echo Verlag.

Wintgens, Leo (2017) *Sprachatlas des Karolingisch-Fränkischen II – „Wi zaach éch dat op Ostbäljesch Plat?" Lautlehre, Formenlehre, Namenkunde, Sprachgeschichte, Wortschatz.* Aachen: Helios Verlag.

参考ウェブサイト

Das Bürgerinformationsportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens
http://www.ostbelgienlive.be/desktopdefault.aspx/tabid-97/205_read-918（最終閲覧日：2018 年 9 月 4 日）

Das Kulturportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens
http://www.ostbelgienkulturerbe.be/desktop default.aspx/tabid-3551/catid-108（最終閲覧日：2018 年 9 月 7 日）
LVR-Institut für Landeskunde und Regionalgeschichte
http://www.rheinische-landeskunde.lvr.de/de/sprache/sprachatlas/dialektkarten/rheinischer_faecher/rheinischer_faecher_1/detailseite_159.html（最終閲覧日：2018 年 9 月 7 日）